2011年（平成23年）
第42号
（6月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

第28回庭野平和賞贈呈式　京都で開催

7月23日　スラック・シワラック氏に贈呈

公益財団法人庭野平和財団（名誉会長：庭野日鑛、理事長：庭野欽司郎）は、例年は5月に東京で実施されていた「庭野平和賞贈呈式」が、東日本大震災の影響により中止していたが、7月23日（土）に京都普門館で開催することになった。

第28回 庭野平和賞の受賞者は仏教国際連帯会議（ＩＮＥＢ）を丸山照雄氏（天晴塾・法華塾主宰）と共同で設立した、タイ王国のスラック・シワラック氏。庭野名誉会長から同氏に賞状、副賞として顕彰メダルと賞金が手渡される。その後、受賞記念講演とパネルディスカッションが行われる予定。

同氏は1933年、タイのバンコクで生まれ、大学卒業後、1953年に英国に留学。英国で法廷弁護士の資格を取得した後、1961年にタイに帰国。帰国後は宗教、文化、教育、環境、社会正義や公共福祉のための数多くの組織の設立に参加する他、教師、学者、作家、社会活動家、環境保護活動家として活躍している。そうした活動により同氏は、1995年に“もう一つのノーベル賞”として知られる「ライト・ライブリフッド賞」を受賞した。

「庭野平和賞」は、宗教協力により世界平和を達成しようという庭野日敬名誉総裁の精神に基づき、宗教協力の理念と活動が更に輪を広げ、多くの同志の輩出を願うと同時に、現にそのような活動をしている人材を表彰し、励まし、さらにその業績が多くの人々を啓発することを祈って設けられた。

「ゆめポッケ」キャンペーンがスタート

6月1日から「ゆめポッケ」キャンペーンがスタートした。同運動は、今年で１３年目を迎えるが、紛争や対立で心に傷を負った世界の子供たちを勇気づけるため、本会の小・中学生が中心となって、文房具やおもちゃなどを詰めた手作りのポッケをプレゼントするもの。

「ゆめポッケ」は、そうした子供たちを勇気づけると共ともに、小・中学生が家族で平和の尊さについて語り合い、自他のいのちを尊び、他者を思いやる心を育んでいる。

キャンペーン期間は8月31日まで。

お知らせ（７月の教会行事）

７月	１日（金）	朔日参り	9：00～
	３日（日）	日曜参拝日	9：00～
	１０日（日）	盂蘭盆会　慰霊供養（脇祖さまご命日）	9：00～
	１５日（金）	釈迦牟尼仏ご命日	9：00～
	２３日（土）	庭野平和賞授賞式及び記念講演会	13：00～

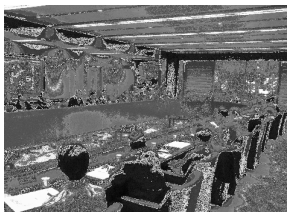
時事刻々

「今夏15％の節電」を関西電力は要請した。東日本大震災での福島原発の事故から、点検休止中の原発の稼働にメドがたたないためだ。▼各界から、節電は賛成だが、経済活動や市民生活に及ぼす影響が大きいと、戸惑いの声も多い。原発再開の要請も出ているという。▼福島県では放射能汚染で十万人近い人が避難させられている。校庭やプールが使えない学校もある。土壌や水の汚染も深刻だ。▼原発の事故は広域で長期にわたる深刻な影響があることが分かった。市民としては原発廃止を望むのは当然のことだろう。▼だが、これまでの生活レベルは下げたくない。国や政府にどうにかしてほしい。というのではムシが良すぎるのではないか。▼釈尊は臨終の際、「少欲知足（欲を少なくして足ることを知る）」という教えを遺した。未曾有の大震災があったことで、生き方を見直すこと。節電はその第一歩となればいい。

東日本大震災から何を学ぶか？　学習会を開催

5月29日、京都教会において「東日本大震災に学ぶ」と題した学習会が行われた。マスコミを通じた情報からだけでなく、大震災の実態、被災者の実情などについて、信仰者として何を学ぶのか、何が出来るのかを考えることを目的として実施された。

衆議院議員の北神圭朗氏を講師として迎え、自ら一ボランティアとして被災地に入った体験を交え、東日本大震災への政府の対応や復興への道程などの基調講演があった。その後参加者との意見交換が行われた。



最後に中村教会長が「本会は復興を１０年のスパンを考えている。被災者への物心両面の支援を継続し、私たちは風評などに惑わされることないようにしよう」と結んだ。

乙訓明社がゴミゼロ運動！

5月3日、乙訓明るい社会づくり運動の会（乙訓明社）20数名が参加して、長岡京市内で清掃奉仕を行った。この取り組みは、NPO法人・世界護美推進連盟が呼びかけ人となり、2007年に始まった市民運動「100万人のゴミ拾い」に、NPO法人・明るい社会づくり運動も協力団体になっていることから、その趣旨に賛同して行われた。

長岡京市役所前に集合し、中小路健吾府議会議員の挨拶の後、3組に別れ活動をスタートした。参加者から「長岡天満宮のキリシマツツジの花びらの掃除やゴミ拾いは、私たちができる小さな行いかも知れないけれど、一人ひとりが繋がることで、被災地復興支援に少しでも力になって届きますように！」と思いを述べた。

5/28 奈良県宗教者フォーラム

5月28日、吉野山ふるさとセンターにおいて、奈良県宗教者フォーラム実行委員会が主催する「第８回奈良県宗教者フォーラム」が開催された。「神と仏と日本のこころ　修験道を考える」をテーマに、奈良県各派の宗教者や市民351人の参加を得て、基調講演・パネルディスカッションが行われた。京都教会からも本フォーラムに毎回参加している。

まず、五條覚尭・吉野金峯山寺本堂管長の導師のもと、東日本大震災の慰霊追悼復興祈願祭が執り行われた。引き続き、第一部として、田中利典・金峯山寺執行長が「修験道入門」と題して基調講演。東日本大震災について「原発事故で『想定外』という言葉がしばしば出るが、自然は恩恵と脅威をもたらし、もともと想定外だ。自然への畏怖（いふ）を忘れた価値観が見え隠れする」と指摘した。

第二部では、岡本彰夫・春日大社権宮司をコーディネーターに「歴史にみる修験」をテーマにパネルディスカッションが行われた。狭川普文・東大寺執事長は「東大寺法華堂でも修験道の色彩が濃い行があった」と紹介した。

●お悟りをいただく　（校成会のことば）

「お悟り」と聞くと、失敗したことや不幸、不都合なことを連想してしまい、「できるだけいただきたくない」と思ってしまいます。しかし、自分にとって好ましくない現象が生じた時、先輩幹部はよく「あなた、それはお悟りだよ」と言って、「悟り」を促してくれます。日常生活の中で真理を体験的につかむチャンスはいくらでもあるのに、凡夫である私たちはその機会を見逃してしまうことが往々にしてあります。現象を「不都合な出来事」と思っている間は悟れません。悟りを「悟り」と受け止めると、「仏さまに生かされている」という気持ちになってきます。そういう心境になること自体、「ありがたい功徳」なのです。ですから、「お悟り」といった時には、「悟りを促されている」という意味があるのです。

ところで、心の転換とか、精神の向上のきっかけになるものに順縁と逆縁があります。順縁とはよい教えを聞くとか、よき師、よき友、よき書物のようにプラスの力に巡り合うことによって、プラスの方向に歩みを進めることです。逆縁というのは人から注意されたり、境遇の上に不遇なことが起こったりした場合、「おお、これは自分の考え方や行動に間違いがあったのだ」と悟って、それを転機として立ち直っていく、そうした縁をいいます。ところが、逆縁は厳しいものですから身にこたえる。それだけにハッと目が覚めて、頭から離れないものです。こうした逆縁こそ大事にしなければなりません。逆縁に遭ってションボリしてしまうのでなく、「これも仏さまのお諭しだ。お手配だ」と受け取って勇気を奮い起こして、不遇な出来事にも立ち向かっていく。要は、結果や現象が「お悟り」ではありません。それをどのように受け止め、内省・懺悔をして日ごろ見つめられなかった自分の内面に気づき、精進に結びつけていくかが大事なのです。それが「お悟りをいただく」という言葉の本当の意味です。

今月の言葉　～夫婦の縁をかみしめる～　京都教会長・中村憲一郎

東日本大震災から３ヵ月、今月１８日には百か日を迎えます。私たちは、ささやかながら亡くなられた方々のご冥福と被災地の復興を祈念して真心からのご供養をさせて頂きたいと思います。

さて、今月の会長先生のご法話は、**「夫婦の縁をかみしめる」**です。これまでも「家庭成仏」や「斉家」を通して、家族のあいだに思いやりがあふれ、家庭が身も心も休まり安らぐ場であれば、仕事に精を出すことも、人の心に寄り添う余裕やあたたかな気持ちもわいてくるとご指導いただいて参りましたが、その家庭の中心が「夫婦」であり、夫婦となる「結婚」の意味は、①幼児性と決別し、ほんとうの大人になる、②お互いに砥石となって磨きあう、ことにあるというのです。

それでは**「ほんとうの大人になる」**とはどういうことでしょうか。会長先生は、「ものごとの道理をわきまえ、小さなことで怒ったりしない、人にやさしく、寛容になること」。**「お互いが砥石となる」**とは、相手の姿を通して、自分を見つめ直し、心を磨き、相手にぶつけている（要求している）苛立ちを感謝に変えること、と教えます。それには、どうしても仏さまの教え（道理）を学ばなければなりません。

日頃の家庭生活を顧みても、私の思い（要求）通りにしてくれる妻は○、思い通りにならない妻は×、と常に自分の思いの物差しで○×の評価をします。だから思い通りにならない、なってないと苛立ち、あげくにケンカになるのです。これはまさに「幼児性」です。幼児は、思い通りにならないと泣く、わめくものです。思い通りにならないからといって相手にいらだちをぶつける行為は、「幼児性」そのものなのです。

冷静に考えるとよくわかるのですが、実は大変難しい。家庭に入ると私たちはなぜか簡単に「幼児」に戻ってしまいます。私は、そこに家族（妻）にたいする甘えがあると思うのです。この「甘え」は、相手に依存する、もたれるともいいます。「わかっているはずだ、このくらいは許されるはずだ」という心です。

たしかに家庭は「港」に譬えられるように、そこで休養を十分とり、燃料（エネルギー）を補給し、明日（の航海）への準備をするところです。しかしその恩恵を受ける対象は、私だけでなく、等しく家族全員のはずです。自分だけが休まり安らごうとすれば、そこでは誰かに犠牲を強いることになるのです。互いに支え合って生きているという道理に背く生き方は他と調和しないのです。

私の経験では、仕事に疲れて帰った時など要注意です。つい家族に要求してしまいます。そんな時私は、自宅の玄関前で、「今日一日無事に仕事ができたのは、家族が元気に一日を過ごしてくれたおかげさま」と自分に言い聞かせてから自宅に入ります。うっかりすると仏様の教えを頂いていても、身についた自己中心が頭をもたげ、休みたい、安らぎたいという欲求を優先したくなるからです。繰り返しくり返し自分の意識に働きかけていくことで、自然に「おかげさま」と思え、行動できるから不思議です。

３年前に妻が病気をしてからは特に、毎日の生活の場で、自分が家族のために何ができるかを考え、行動することができるようになりました。家庭生活の中にも「食器洗いやゴミ捨て、時々簡単な料理」という私の役割ができたのです。まさに「病学」の機会を得たのです。結婚して３１年目、会長先生から結婚式に頂いたお言葉**「愛して礼を失わず（互いに慈しみ敬い合う）」は、夫婦の絆を持続させるポイント**と改めて教えていただきましたが、「夫婦はまた、陰と陽のように互いに補い合って一つのはたらきをする（許し合いと感謝の心）」ことも含め、心から実感できる今日を迎えさせて頂いています。

これも仏様の教えに結縁した大きな喜びです。これからも毎朝の挨拶の中に、「あなたのおかげさまで」の心を添えて挨拶を交わして参りたいと思います。

東日本大震災について意見交換　　佼成議員懇話会にて

4 月 28 日、京都教会において、佼成議員懇話会の早起き会が開催された。議員 18 名と教会役員 12 名の計 30 名が早朝 7 時に集まった。

冒頭のあいさつで、同懇話会の幹事長である府議会議員の植田喜裕氏は、エコな生活の実践として「水道を流しっぱなしにしないで洗面器に水を貯めて、少しの水で洗顔している」という実践例をあげた。

これに対して同議員の酒井常雄から、阪神大震災の時にボランティアをした時、「コップを逆さまにしてそこに水を貯めて目を洗った事を思い出した」と述べた。

また、同議員の北岡千はる氏は、被災地に行き、現地の状況を目の当たりにして、「継続的な支援の必要性を実感した」と発表した。

最後にこうした意見に対して、中村教会長からは、「人や物の支援は一段落したと聞いている。現地では、盗難事件などがあり、外部の人に対する不信感もあるらしい。一方、市民の関心も下火で街頭募金に立っても、素通りする人も増えている」とし、だからこそ「今後は、5 年、10 年先を見据えた上で、継続的な支援が必要と考えている」と結んだ。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《19年ぶりのソ連訪問》

第2回国連軍縮特別総会では、もう一つ大きな収穫があった。特別総会の9日目、ソ連のグロムイコ外相が演説の中で**「ソ連は核兵器を最初に使用する国にならない」**という、ブレジネフ書記長のメッセージを読み上げたことだった。その要旨は、「いま最も緊急に重要なことは、**ますます破壊力を強める兵器の終わりなき増強をやめ、核の惨事を回避することである。人々を核の破壊から救いたいとの願いから、ソ連は核兵器を第一に使用する国にならないとの義務を負うことを宣言する。**この義務は国連総会議場での発表の瞬間に発効する。世界の人々は、このソ連の決定に他の核保有国が追随するものと期待する権利を持っている。さまざまな国で最近、政治家、世論が核兵器凍結の考え方に向かっているが、これは正しい方向であり、核兵器の相互凍結を第一歩とし、最終的にこれを完全に廃絶するという考えはソ連の立場に近い」

このブレジネフ書記長のメッセージは、庭野開祖が第1回の軍縮特別総会で**「偉大なるカーター大統領閣下とブレジネフ書記長閣下に対して、危険を冒してまで武装するよりも、むしろ平和のために危険を冒すべきであると申し上げたい」**と訴えたことも含めて、世界のさまざまな人々の訴え、願いに対する回答と言ってもいいだろう。ブレジネフ書記長が、この第2回軍縮特別総会に出席できず、グロムイコ外相にメッセージを託したのは、健康状態がすぐれないためだと伝わっていた。

国連から帰国した庭野開祖は、ブレジネフ書記長に対してお礼を述べるために、ぜひソ連を訪問したいと考えた。さっそく在日ソ連大使館を通して、ソ連訪問の希望を申し出た。その願いが、意外に早くかなえられたのである。こちらとしては、世界宗教者平和会議(WCRP)の役員数人による平和使節団としての訪ソを希望していたのだが、今回はとりあえず、庭野開祖と立正佼成会からの同行者を招待したいとのいう回答だった。

この訪ソについて、懸念をいだく人もいた。当時は、ソ連を訪れるだけで社会主義思想の持ち主のように見なされる傾向があった。また、ソ連のよい所だけを見せられて洗脳されてしまうのではないか、といった警戒心をいだく人もいた。しかし「百聞は一見にしかず」というではないか。とにかく、自分の目で実際にソ連を見なくては、ソ連という国の本当の姿を知ることはできない。

社会体制が違い、信じる思想が違っているからといって、いたずらに恐れ、身構えて対立していたのでは世界の平和など絶対に実現するものではない。力には力だというので、仮に相手を圧倒する力を持って組み伏せたとしても、それでは本当の平和はもたらされるものではない。必ずまた力によってくつがえされる時がくることを、歴史は語っているのである。

ソ連には、京都会議以来、欠かさず世界宗教者平和会議に参加してくれる何人もの同志がいた。「交流を重ねていけば、やがて必ず世界宗教者平和会議の代表の訪ソが実現する日がくるはずだ。何かの力に利用されるようなことは、決しておこらない。**まずソ連の宗教者を信じてしまうことだ。そうすれば、向こうもこっちを信じてくれて、互いに胸襟を開いて話し合えるはずなのである。**」と、庭野開祖の心は決まっていた。

その年の9月22日から6日間にわたって、ソ連を訪問した。ソ連を訪れるのは、昭和38年の秋に核兵器禁止宗教者平和使節団として欧米諸国を歴訪したとき以来、19年ぶりだった。9月22日に成田をたち、その日の夜、モスクワに到着した。空港に、ロシア正教会のガリッキー・フィラレート府主教、アレクセイ・ボエフスキー渉外部長、ソ連仏教徒代表のシャグダロワ女史らが迎えてくれた。ボエフスキー氏は、京都会議開催のための準備会議以来の顔なじみであった。

庭野開祖を抱擁して「長いこと待っていました。よく来てくれました」と、顔を頬にこすりつけてきた。ボエフスキー氏は、ホテルへの案内をはじめ、何くれとなく面倒を見てくれる。革命65年を迎えたソ連は、19年前とは隔世の感があった。

《あなたは勇気のある人だ》

翌日は、外務省を訪ねて極東2部の部長に会い、招待のお礼かたがた訪ソについての私どもの期待を話した。ソ連の政府要人は、政治的立場で発言する時は厳しい意見を前面に出してくるが、一方で、日本から招いた客人への配慮も忘れない。この日の夜は、フィラレート府主教が夕食会を開いて下さった。　(つづく)

渉外部からのメッセージ

新聞に福島県の方の言葉が紹介されていました。「国難と言いつつ相手のあら探しに熱心な政治に、被災者はあきらめ顔です」と。大方の国民はこの意見に賛同されるでしょう。しかし、これは政治だけではありません。マスコミは権力の監視の名の下に、政府批判を繰り返し、官民共に真実を小出しにして、責任逃れをしているようにしか思えないところもあります。だからといって、私たちがあきらめたり、関心をなくしてはいけないことだと思います。人を信じ、力を合わせ、未来に向けて歩むようにしたいものです。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。　RKK京都教会　FAX 075-762-2266